

## 日本統治時代の「小学生」が集う 小さな同窓会

6月4日正午、私は台北市内の日本料理店「大和」で行われている小さな同窓会に参加した。この同窓会は、日本統治時代にあった旧台北市建成小学校（現・台北当代芸術館）の卒業生を中心に月に一回程度行われている食事会である。建成小学校の卒業生だけでなく、かつて台北市内にあった寿小学校（現・西門國小）や樺山小学校（現・内政部警察署）の卒業生も参加している。

12時少し前であったが、円卓テーブルが一つある個室ではすでに卒業生たちが日本語での会話を楽しんでいた。突然の訪問だったものの、日本統治時代の暮らしや学校生活、戦争体験についてお話を聞きたいと伝えると、皆さん笑顔で「大歓迎です」とおっしゃってくださいました。

かつて日本統治時代の台湾では、内地人（日本本土出身者）が通う「小学校」、本島人（漢人系住民）が通う「公学校」、そして蕃人（原住民）が通う「蕃童教育所」に分かれていた。言うまでもなく台湾人が「小学校」に通うのは簡単なことではなく、厳しい試験もあった。ある人は小学校の面接試験において、尊敬する人を尋ねられ、「天皇陛下」と答える

べきところを「お父さん」と答えてしまい、公学校に行くことを余儀なくされたという。

この日、集っていた7名は皆、小学校の卒業生であり、すなわちエリート層である。同窓会の取りまとめ役である藍昭光さんは、京都大学法学部で国際法を学んだインテリで、祖父も父親も日本政府から勲章を授かったことがあったという。また私の右隣に座っていた張許雪さんの父親は日本統治下の台湾において3名のみ選出された貴族院議員の一人であった。

手巻き寿司や鍋焼きうどん、ざるそばがテーブルに並び、思い出話に花が咲いた。先生の話や当時の台北の町並み、自宅近所の様子や親の仕事など、鮮明なエピソードが次から次に出てくる。女性陣にいたっては淡い恋の話でも盛り上がり、笑い声が絶えない。その表情は小学生のように無邪気で、うら若さと可愛らしさに満ち溢れていた。

そして話題は1945年5月31日の台北大空襲にも及んだ。戦争末期、台湾では米軍機による空襲が繰り返された。なかでも甚大な被害を出したのが5月31日の台北大空襲であった。この日の

朝、米軍機の B-24 によって、台湾総督府（現・総統府）など主要官庁が集中する台北城内に無数の爆弾が投下され、3,000 名以上が亡くなった。また右翼を被弾した台湾総督府では、建物内部にいた人々が地下室に避難したものの、そのまま生き埋めになってしまうという悲劇があった。

空襲から三日三晩は泣き声も聞こえてきたという。そして空襲後から総督府周辺では「幽霊が出る」という噂も広まったそうだ。ある人は総督府近くの奉遷防空壕で「ザー、ザー、ザー」という爆弾音を聞き、ある人は疎開先から炎が立ち上る台北の街を目にした。それぞれに 5 月 31 日の鮮明な記憶が刻まれている。戦争は、かつての少年少女に忘れ去ることのできない記憶を背負わせたのである。

私はまだまだ尽きない話をうかがっていたかったが、お店の休憩時間の 14 時を迎え、この日の同窓会はここまでとなった。「夏の暑さは年寄りには厳しい」と話す藍さんは、7 月と 8 月は同窓会を開かないと伝えた。暑さが少しは和らぐ 9 月に、またお話の続きをうかがえることが今から待ち遠しい。



思い出話に花が咲く、かつての「小学校」卒業生たち